

2024年3月10日

主題「神の子どもとされる」

ルカの福音書 6:31-36

序

前回は「敵を愛する」というイエスの教えから、チャレンジを受けました。自分には到底出来ないと思えるこの教えを、綺麗事ではなく、言葉だけでなく、受け取ることができるのはイエスの十字架があるから。イエスという模範に、どこまでも慰めを受けながら、この生き方を私の生き方としたい、と共に願いました。

さて、本日の御言葉はこの「敵を愛する」につながる教えです。今日も共に御言葉からイエスの心を受け取っていきましょう。

1. 人からしてもらいたいと望むとおりに、人にしなさい

それでは、31節をご覧ください。

人からしてもらいたいと望むとおりに、人にしなさい。

このみことばは、聖書の中で黄金律、ゴールデン・ルールと呼ばれる教えです。イエスの教えを要約するものとして知られているとても重要なみことばです。そしてこのことばは、クリスチャンであっても、そうでなくとも、うんうん、そのとおりで、と納得するものではないかと思います。そして、この教えをよく見ていくと実は、二つのことが語られていることに気付かされます。一つ目は、人から自分がしてもらいたいと望んでいることを、他の人たちにもするように、という実践の教え。二つ目は、「人にする」ことだけではなくて、その「やり方」「方法」も教えています。

どういうことかという、挨拶で考えるといいかもしれませんが。人から挨拶をされたいと望むのであれば、人に挨拶をする、というのが、一つ目の教えです。そして二つ目の「やり方」「方法」では、ただ挨拶をするのではなくて、自分がしてもらいたいと望む挨拶をする。つまり、笑顔でする、とか、顔を見てする、とか、そのような挨拶の方法、やり方になるわけですから、ここで言われていることは、ただ人からしてもらいたいことをすればいいのではなくて、その内容まで取り扱われている、ということです。先ほどの挨拶の例でいえば、ただ形だけ挨拶をするのではなく、心を込めて笑顔で挨拶をする、ということになります。ちなみにこのイエスの教えは、マタイの福音書 7:12 ではこのようにあります。

ですから、人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい。これが律法と預言者です。

このマタイの福音書では、このゴールデン・ルールに加えて、「これが律法と預言者です」と語られている。つまり、旧約聖書がそう言っているのだ、これが、律法の本質なんだ、と言っているわけです。律法の本質の詳細はマタイの福音書 22:36-40 にこのようにあります。

「先生、律法の中でどの戒めが一番重要ですか。」 イエスは彼に言われた。『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』これが、重要な第一の戒めです。『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』という第二の戒めも、それと同じように重要です。この二つの戒めに律法と預言者の全体がかかっているのです。」

つまり、「神を愛し、人を愛すること」と「人からしてもらいたいと望むとおりに、人に」することは、重なっており、「神を愛し、人を愛する」、この心を持って、「人からしてもらいたいと望むとおりに、人に」しなければならない、ということです。そして、その具体的な内容を次の 32 節-34 節で三つの事柄を通して教えています。32 節-34 節。

自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも同じことをしています。返してもらおうつもりで人に貸したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、同じだけ返してもらおうつもりで、罪人たちに貸しています。

ここでイエスは、「罪人たち」と 3 回繰り返して語られている。この「罪人たち」とは一体誰のことを指しているのでしょうか。ここで言われる「罪人」というのは、人間全体ではなく、当時一般的に「罪人」と呼ばれている人たちを指してイエスは「罪人たち」と言っているんです。当時ユダヤ人たちは「取税人」、「遊女たち」、「異邦人」などを、神の民の救いに入れられていないと決めつけ、軽蔑して「罪人たち」、と呼んでいました。この呼び方をイエスは敢えて取り上げ、語られたのです。そして、自分を愛してくれる人を愛することなんて、あなたがたが罪人と軽蔑しているあの人たちでさえ、そのようにしている。自分に良いことをしてくれる人に良いことをすることも、同じだ。返してもらおうつもりで人に貸すこと、ここで「貸す」使われていることばの意味は利息をつけて「貸すこと」を意味していますから、

利息をつけて貸すことも、罪人たちは同じようにしているのではないか。

これらをもっとわかりやすく言うならば、神を信じていない人だってこれらの当たり前なことは弁えているし、実行しているじゃないか。つまり、良いことをされれば、ちゃんとお返しをする、ギブアンドテイクというのは普通に罪人たちもしているんだ、ということ。そのように罪人たちと同じようにして、果たして神からの恵みはあるのだろうか、とイエスは問いかけているわけです。それでは、神を信じる者、キリスト者はどのように生きていくのか。それは、35-36節にあるとおりです。

2. 神から与えられる多くの報い

しかし、あなたがたは自分の敵を愛しなさい。彼らに良くしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになります。いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くなりなさい。

キリスト者は、やられたらやり返し、良いことをされたら良いことを返す、そのような精神で何かをするのではない。そうではなく、計算することなく、見返りを求めることなく、敵を愛しなさい、自らの敵に良くし、返済を考えずに貸すようにとイエスは言われているのです。そして、キリスト者はこのイエスのことばに従って生きるとき、与えられるものがある、とイエスは教えてくださっています。それは、「あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになる」ということ。

イエスがここで「報い」があるということをはっきりと語っているのです。私たちの多くは、良いことをすれば、よい報いが与えられると期待していると思うんです。しかし同時に、報いを期待して善い行いをするというのは、いかななものか、本当の善い行いは、報いなど期待せずになされるものだ、とも思っていると思います。

だから私たちは、心の中では期待しつつも、善い行いの報いが欲しい、などとはあまり口にしないと思うんです。しかし、イエスはここで「報い」という言葉を使い、明確に語られます。私たちは、善い行いに対して「報い」を期待してよいのです。問題は、その報いを誰から求めるか、です。人からの報いなのか、天の父からの報いなのか。それが問題なのです。

ですから、私たちは人からの報いと神からの報いを混同せずに、諦めず「善い行い」に励みたいのです。神からの報いに目を向けること。これは私たちの価値観をひっくり返さなければできません。人から褒められ、認められ、自分が頑張ったら頑張った分だけ、いやそれ以上に、報いを受けたい、そう思うのが私たちだと思うんです。しかし、人からではなく、神からの報いが、イエスの言葉によって、約束されていること。その与えられる報いの最たるが、「いと高き方の子ども」となること。つまり、罪ゆえに滅びるはずだった私たちが、真のいのちを得て、しかも神が私を「子ども」としてくださるのです。これほど大きな報いは他にはありません。

結論 神の子どもとなる

そして、イエスは続けて私たちが敵を愛する根拠を語られます。35 節後半～36 節。

いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くなりなさい。

いと高き方、すなわち、私たちの父なる神は「恩知らずな者」にも「悪人」にもあわれみを注がれる。つまり父なる神はそのような者たちにも「親切」であり「愛情深く」、「情け深い」のです。詩篇 86:5 節の「いつくしみ深く」と「あわれみ深い」は同じことばです。詩篇 86:5。

主よ まことにあなたは いつくしみ深く 赦しに富み あなたを呼び求める者すべてに 恵み豊かであられます。

主は「いつくしみ深く 赦しに富み あなたを呼び求める者すべてに 恵み豊か」である。そして、36 節でも「あなたがたの父があわれみ深い」と語られますが、これは 35 節の「あわれみ深い」とは違うことばが使われています。こちらのことばは文字通りの「あわれみ深さ」であり、「慈悲深い」といった意味です。これは、詩篇 86:15 の「あわれみ深く」と同じです。詩篇 86:15。

しかし主よ あなたはあわれみ深く 情け深い神。 怒るのに遅く 恵みとまことに富んでおられます。

主は「あわれみ深く 情け深い神。 怒るのに遅く 恵みとまことに富んで」いる。つまり、このイエスのことばは、私たちの父なる神が「恩知らずの者」「悪人」にさえ「情け深く」「あわれみ深い」のであれば、その子どもである私たちもまた「情け深く」「あわれみ深く」なるように言われているのです。

子どもは良くも悪くも、親に似ていくということがよく言われると思います。私も子育てをしながら、子どもから出る悪い言葉に、ハッと自分の言動を反省することが多くあります。それは子どもたちが、親のことを信頼しつつ、よくよく見てるからだと思うんです。私たちも父なる神を、本当に父として慕い、信頼し、どんな方であるかを、御言葉から知っていきたいのです。神の子どもとされている私たちは、「情け深く」「あわれみ深い」その愛を十二分に受け取っていくその中で、この父に似た愛を実践する者とされていきたくのです。Iヨハネ 3:1-3 にはこのようにあります。

私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい。事実、私たちは神の子どもです。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。

私たちの父は、わたしたちを神の子どもとするためにあまりにもすばらしい愛を与えてくださいました。それはイエス・キリストというご自分の愛する子を私たちのために与えてくださった愛。それを信じる者は神の子どもとされている。ですから、神の子どもとされている者はこの愛を知り、ここに生きているのです。「キリストが清い方であるように、自分を清く」する。このようにキリストの愛ゆえに私たちは成長し、生きていくのです。

敵がいたとしても、神の子どもであるという事実に、私たちは幸いを覚え、神が「あわれみ深い」ように「あわれみ深く」、愛のある生き方をささげていきたいのです。それは少しずつであっていい。その変化は私によってではなく、神である聖霊の働きによるものなので、肩の力を抜いて、私たちはただ神の前に出て、祈り求めていきたいのです。

イエスの教えと自分の現実のギャップに戸惑いを覚える私たち。しかし、イエスは私たちが出来ないことを突きつけて意地悪を言うような方ではありません。そうではなく、私たちに本当の幸いがあるのかをみことばを通して教えようとしておられる。そして、私たちがどこを向いて、これらの教えを実践していくのか、そこが問われているのです。目の前の報いに目を奪われ、人に期待してしまう私たちですが、私たちが向くべきは「神」です。神がどれほどの愛を与えてくださったかを知り続け、神が与えてくださる「報い」には大いに期待していきたい。この世の価値観から自由にされたその愛を私たちは携えて、今週もまた遣わされていきましょう。